

京まち工房



SUMMER
情報交流誌

no.

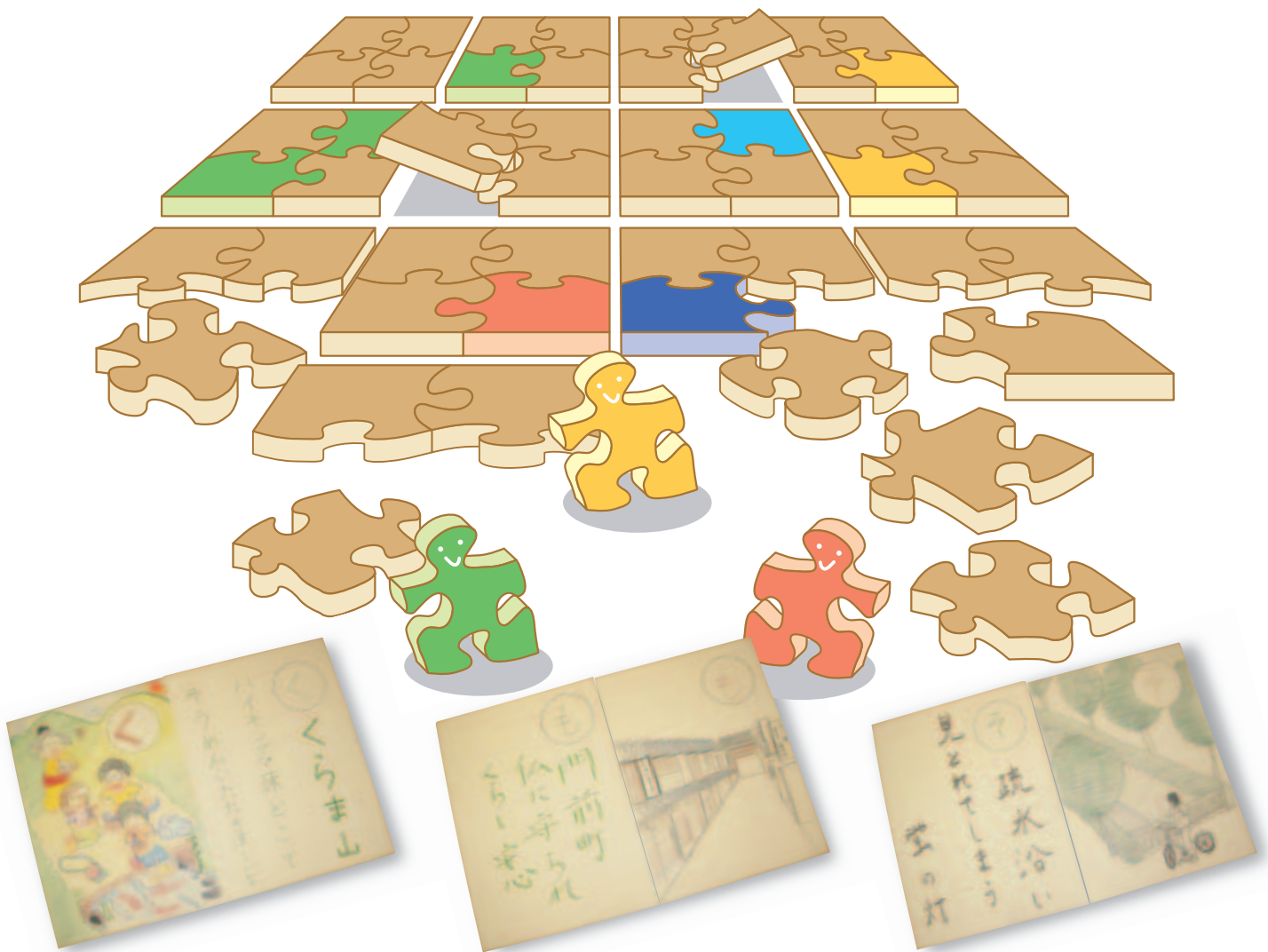
27

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

新たな出会い・交流 始まっています

～「ひと・まち交流館 京都 オープンから1年」～



昨年の6月に「ひと・まち交流館 京都」がオープンして1年。

京都市景観・まちづくりセンターは、市民活動の拠点のひとつとして、他の3センターと連携を図りながら、景観・まちづくり大学による各種セミナーや、シンポジウム、まちづくり相談など様々な事業を行い、地域まちづくり活動や地域間交流の促進など地域住民が主体のまちづくりをサポートするための活動に取り組んでいます。

ワークショップルームやまちづくり交流サロンなどの施設を活用し、市民活動団体との共催事業などにも積極的に取り組んできました。こうした活動を通じて、まちづくりに関する市民

の皆さん相互の新たな出会いも生まれました。

また、京都のまちづくりの歴史を紹介する交流館1階の常設展示施設「京のまちかど」も展示案内ボランティアの皆さんのご協力により、見学者の方々からご好評を頂いております。ぜひ一度ご覧になってください。

この4月には新たなスタッフを迎え、フレッシュな新体制でがんばっています。まちづくりに関するご相談など何でも結構ですので、お気軽にお越しください。

まちづくりに関する新たな交流の場として、京都市景観・まちづくりセンターを、どうぞご活用くださいますようお願いいたします。

京都市景観・まちづくりセンターの 事業概要

景観・まちづくりセンターが、平成15年6月に、菊浜小学校跡地にできた「ひと・まち交流館 京都」に移転してから1年。

平成15年度に景観・まちづくりセンターが行った事業概要を紹介します。



地域まちづくり活動の促進

■まちづくり活動支援

住民の主体的な取組によるまちづくりを進めるため、地域の特性に合わせて、主体的に地域課題の解決や地域環境の整備に取り組む活動を支援。

〈まちづくり専門家派遣〉

〈まちづくり活動助成〉



■第2回京都まちづくり交流博

平成13年度に実施した「第1回京都まちづくり交流博」で得られた関係者との連携を生かし、より広くまちづくりに関わる方々が交流し、情報を受発信。



住民、企業、行政による
パートナーシップの
まちづくりを推進

1
地域まちづくり
活動の促進

2
地域と共生する
土地利用の促進

3
まちづくりに
関する
情報発信・相談等

■景観・まちづくり大学

自主的にまちづくりを行うための方法や知識を体系的に学ぶことができる常設のセミナーを実施。

住民を初め、学生、専門家、市民活動団体関係者等様々な立場の市民が地域のまちづくりに参加し、その力を発揮することができるように情報提供や活動を支援。

○地域まちづくりセミナー



○京のまちづくり史セミナー



○京町家まちづくりセミナー



○まちづくり専門家セミナー
○学生まちづくりセミナー
○こどもまちづくりセミナー

○展示案内ボランティアセミナー



○京町家再生セミナー



地域と共生する土地利用の促進



■京町家ネットワーク推進

京町家再生プランに基づき、京町家居住者・所有者や事業者の主体的な京町家の保全・再生を促進するため、市民、京町家居住者・所有者、専門家、企業、市民活動団体等の幅広いネットワークを充実。「京町家なんでも相談」等を実施。



情報発信・相談等

■景観・まちづくりシンポジウム

広く市民の皆様向けに、景観・まちづくりに関する情報の提供や普及啓発を目的として、センター事業の成果等を盛り込んだシンポジウムを開催。



■第2回景観・まちづくりコンクール

京都らしい都市景観の維持・向上に寄与する建造物や地域住民による景観形成やまちなみの維持・保全に関わるまちづくりの取組事例について第2回景観・まちづくりコンクールを開催。



■ニュースレター「京まち工房」

センターの事業内容や市民のまちづくり活動の状況を広くPRするため、ニュースレターを編集・発行。

■まちづくり相談

地域での自主的なまちづくりの推進をはじめ、マンション、町家、袋路等の問題に関する相談に応じ、各種のアドバイスや情報を提供。

■ホームページによる情報発信

情報システムを活用し、ホームページ上でまちづくり活動やまちづくり団体等に関する情報を初め、まちづくり団体自身が作成した団体情報等を発信。

■展示施設「京のまちかど」

パネル、画像、年表、模型など様々な媒体を用いて、京都のまちづくりに関する情報をより分かりやすく提供。



「京極歴史探偵団」

～京極学区の宝物を再発見～



住民主体のまちづくりを紹介するこのコーナー。

今回は、身近な疑問から、様々な発見を通して、地域への思いを育て、また、その過程での「気づきや思い」を大事に育てて、地域のこれからの姿を考えていきたいと活動されている京極学区の京極歴史探偵団の取組を紹介します。



歴史と文化が息づくまち、京極

賀茂川や御所に挟まれ、自然環境に恵まれた京極学区。平安時代には貴族の邸宅が築かれ、豊臣秀吉の時代には寺町通沿いに多くの寺院が軒を並べるようになりました。

明治に入ると、府立医科大学の設立や立命館大学の設置など、学問のまちとなりました。

現在、まちの中心には庶民の台所としてにぎわっている出町商店街があります。鯖街道の終着地点とも言われ、昔から若狭小浜の海産物や遠く海を渡ってきた数々の品々が集まり、市が立つところでした。

京極学区ではこの商店街を中心に、様々な取組が行われています。

ネットワークを生かしたまちづくり

京極学区のまちづくり活動の特徴として、様々な団体が柔軟な組織構成により、活発な活動を続けていることが挙げられます。

例えば、地元の方々と共に参加し、このまちの中でみんな一緒に楽しく遊び、学びたいという方々が参加する「でまち倶楽部」などがあります。

メンバーは、様々な立場の人たちが参加しており、ここでは多くのアイデアが生まれ、参加者同士のネットワークが築かれています。

京極学区では、色々なところから様々な人々が集まってきて、出会いが広がっています。

そして、福祉・環境・にぎわいをテーマに、幅広く、そして楽しみながらまちづくり活動に取り組まれています。

「京極歴史探偵団」の誕生

京極歴史探偵団は、京極ふれあい活動の一環として、「歴史」という、子どもからお年寄りまでみんなが興味を持って楽しむことができるテーマのもとに、京極小学校の子どもたちを初め、地域の皆さんに京極学区というところは一体どんなところ？昔は一体どんなところだったのだろうか？そんな素朴な疑問から、様々な発見を通して、京極学区への思いを育て、また、その過程での「気づきや思い」を大事に育てて京極学区のこれからの姿も考えていきたいという有志によって結成され、平成14年からその活動を始められました。



まちの将来像を求めての「宝探し」

京極歴史探偵団の活動は、平成14年の11月から始まり、自分たちのまちの歴史を振り返る「まちあるき」など、今までに4回の催しと、番外編として「清水界隈へんなもん

ツアー」を開催しました。

京都市歴史資料館から講師を招き、京極学区における古代から明治までのまちの歴史についての話を聞いたり、自分たちの住んでいるまちのいいところを再発見する「まちあるき」のほかに立命館大学との連携によるウォークラリーやクイズ、写真コンテストなどが行われています。

立命館大学との連携企画では、当日のあいにくの雨で、せっかく学生さんが企画したプログラムを変更せざるを得ないなどということはありませんでしたが、京極学区の特色である大学など地域住民以外の方々とのネットワークを生かした良い取組になったそうです。

また、30年前の写真を手がかりにして、その場所に行って写真を撮ってくるというスタンプラリーや京極小学校の体育館に大きな地図を用意し、今まで京極歴史探偵団が見てきたところ、発見したところ、「京極のトリビア^(注1)」で寄せて頂いた情報をもとに探検したところをマップに書き込む、「京極版まち歩きすごろく」作りなどを行いました。

今回、京極ふれあい活動の一環として始まった取組ですが、まちの「宝物」を見つける過程で、色々な方々から疑問や意見も出され、子どもたちから子育て世代の皆さん、京極学区に昔からお住まいの方々など多くの世代の人が、自分のまちの将来像について語り合える機会を設けることができたのは、大変意義深いものであったそうです。



まちあるき



京極文化祭

住民同士の顔が見えるまちづくりを目指して

様々な取組が活発に行われている京極歴史探偵団は、地域をより深く知り、まちへの思いを育てるほかに、多世代と一緒に調べたり、まとめたりする交流の過程で、地域住民同士の顔が良く見えるまち、風通し良く感じるまちにしたいとの思いが皆さんにあるそうです。

また、地域の広報誌「きょうごく」^(注2)の中で、「歴史探偵団の活動は長続きさせたいと思っています。そのこつは、遊びごころを持ち続けることだと思います。義務感だけの活動では、途中で飽きがきて必ずいやになります」と地域の方が語っておられるように、無理せずに自分のできる範囲で継続して取り組むことが大事だとのこと。

相互の信頼に基づく無理のないまちづくり活動。ゆっくりではありますが、自分たちのペースで日々進展しており、今後の活動が楽しみです。

(注1)「京極のトリビア」

京都市職員研修を京極学区の皆さんにお手伝い頂いたときに職員から出されたアイデアとのこと。

(注2) 広報誌「きょうごく」

地域の皆さんと一緒にまちづくりを進めるため、タイムリーな情報の提供を目指し、京極まちづくり委員会により毎月、発行されている広報紙です。京極歴史探偵団のほか、京極学区における様々な取組を紹介、掲載されています。

平成16年度 景観・まちづくり大学セミナー開講のお知らせ

平成16年度の景観・まちづくり大学は7月から開校します。今年度は皆さんにより分かりやすく新たな枠組みで、前期7月～10月、後期11月～2月の2期構成で行います。詳しくは当センターまでお問い合わせください。

京のまちづくり史
セミナー

まちづくり情報発信
セミナー

京町家再生
セミナー

こどもまちづくり
セミナー

その他のセミナーとして、まちづくり専門家セミナー、地域まちづくりセミナー、学生まちづくりセミナー、展示案内ボランティアセミナーを予定しています。

平成16年度より、賛助会員の方は、すべてのセミナーを無料で受講できます。

(賛助団体の方は、ひとつのセミナー3人まで)

お知恵拝借～

特定非営利活動法人 新開地まちづくりNPO



新開地まちづくりNPO
事務局長 古田篤司氏

今回の舞台は、戦前まで関西を代表する中心市街地であった神戸市の新開地地区です。そこで、「タウンマネジメント」をベースにした活動を行っている「新開地まちづくりNPO」の事務局長・古田篤司さんにお話を伺いました。

新開地まちづくりNPO の事業展開

新開地まちづくりNPOが基本的にやろうとしていることは、一言で言えば中心市街地の抱える問題の改善です。一時期、「こわいまち」、「汚いまち」と言われていたこのまちですが、長い時間をかけて「安心して暮らせる安全で楽しいまち」として甦ろうとしています。住民の立場でこそできるまちづくりを、行政や商店街、その他の民間団体などと協力しながら、マネジメントしていこうと考えています。

当法人では、主に3つの角度からのアプローチにより、諸事業を組み立てています。

まず、商業面での活性化です。特に商業地としてのポテンシャルをいかに生み出し、アピールするか、ということに重点を置いています。

次に、地域コミュニティの再構築という視点です。この地域は神戸の中では比較的長い歴史を持っています。しかし震災とその後の復興のためのまちづくりの結果、新しい住民層が定住し、昔からの住民層との間のコミュニティづくりがひとつの課題になっています。そこで、事業を通じてまちに対する愛着を持ってもらうという視点を大切にしています。

そして最後に、このまちの特色づくりとして「遊びとアート」をひとつのキーワードとしてまちづくり事業を展開しています。

従来の地縁的な関係者はもちろん、多くの人から愛されるまち、つまり「新開地のファン」をどうやって増やしていくかということを基本の戦略にしています。



新開地商店街シンボルゲート

「タウンマネジメント」 について

タウンマネジメントとは、地域をつくる主体づくりと言えるのではないのでしょうか。

まちづくりは地域に暮らす住民により行われることが基本ですが、昨今、社会状況が大きく変化し、まちを変えていくという目標も1つ2つの事業で達成することは難しくなっています。そういう流れから、住民だけでまちづくりを展開するのは困難と言えるでしょう。

これまでのまちづくりは、常に行政が旗振り役でした。そしてコンサルタントが行政計画の立案を担うなかで地域に派遣される、そこに住民が参加する。そんな流れを「市民参

加」と呼んでいました。しかし財政の悪化により、かつてと比べて「計画から実施」というプロセスが容易でなくなったため、このシステムは機能不全に陥っています。

これからのまちづくりでは、行政に対して新しい仕組みを提案すること、行政にできない部分で地域に必要な領域を開拓し、事業として仕立てていくことがますます必要になってきています。そこでタウンマネジメントという考え方が出てくるのです。

そのためには地域に根ざした一定の専門能力を持っている人材が必要です。まち全体のことを四六時中考える当事者がいないとタウンマネジメントは機能しません。地域の人の思いを形にしていくことに対して何が 필요한のか、どこが限界なのかを見極めながら、実施のプロセスを築けるタウンマネージャーが必要なのです。



平成16年度新開地音楽祭の様様

新開地のまちの様子の変化と これからの事業展開

NPOができて4年半、まちの雰囲気は大きく変わりました。もちろん私達の活動の結果だけではないのですが、新しい都市機能を意図的に加えていっていることは間違いありません。

しかし、商業地の再生という点では、まだまだ十分ではないと考えています。

今、一番力を入れているのは店舗のプロデュース事業です。新しい顧客をつかみ、店舗の新陳代謝を活発にして、生活者のニーズに応じていくまちにしなければなりません。

その場しのぎの空店舗対策より、回り道に見えても、まちとしてできる活動をきちんと行い、人材集め・組織づくり・事業の組み立てができるようになって初めて商業地の再生事業に力を入れることができる段階に行き着くのだと考えます。

一般の市民にとって、明らかに「新開地は変わった」という印象を持ってもらえるまで、あと3~5年かか



平成16年度新開地音楽祭の様相

るかもしれません。専門家や身内に評価されるだけでなく、これからの事業の中で意識していかなくてはならない視点だと思っています。

古田さんにとっての 「新開地の魅力」とは？

大変なまちだ(笑)と思っています。

昔の繁栄からどん底の状態を経験し、その後あらゆるまちづくりの知恵と手段を講じて、まちを再生させ

る努力をした結果、今の状態をなんとか創り出しました。これが一般の人にも良くなったと実感できるくらいになった時、全国のまちづくり活動を行っている方々の励みになるのではと思っています。そういう希望の光を与えられる可能性に新開地のまちづくりの魅力を感じていますし、新開地で行っているフレームを「例外」ではなく、「一般化」していくことが大切だと考えています。

【まちづくり工房のご利用について】

景観・まちづくりセンターには、地域の広報誌やチラシ、冊子、資料の作成に利用できる印刷機、紙折機等の製本機器、パソコンやプリンター等を用意しています。

地域のまちづくり活動等に自由にご利用頂くことができますので、ご活用ください。

印刷機の使用及び用紙等は、有料になりますが、それ以外は、無料でご利用頂けます。

詳細につきましては、センター窓口にご直接お尋ねください。



【地域情報のご提供について】

当センター施設の配架棚に設置するチラシ等の資料、メールマガジンに掲載する地域まちづくり情報を募集しています。各地域での耳寄りの情報がありましたら、ご連絡ください。

ご提供は、郵送、ファックス、電子メール等どのような方法でも結構です。

京町家の保全・再生の事例

～あたたかい 風の吹く家～

F邸 (伏見区)



正面から見たF邸

伏見区、丹波橋駅周辺は、かつては町家が多く立ち並ぶ町並みが残っていましたが、最近では町家も数少なくなり、町並みも失われてきました。そうした地域の中で、周辺にまだ残る町家に配慮して改修された町家がF邸です。F邸は、2戸がひとつの建物になった借家建ての建物です。昭和5年に建てられ、その新築

の段階からFさん一家がお住まいになっています。当初は借家でしたが、昭和20年代の終わりごろに大家さんから買い取り、現在に至っています。最近になって、各所の傷みが大きくなり、改修に踏み切られました。

当初は改築も考えられたそうですが、改築となると連棟の建物なので隣家への影響が大きくなり、隣家との間をある程度空けなければならなくなります。そうすると、その分だけ家が狭くなることから、改築ではなく改修ということにされたそうです。Fさんは、改修するとなった時に、どこにどのように相談したらよいか迷われたそうですが、ちょうど知人に「NPO法人古材バンクの会」(以下「古材バンクの会」)をご存知の方がおられ、ご相談されました。最終的に改修は「古材バンクの会」の設計担当の力石さんに設計をお願いし、進められることになりました。

改修に当たっては、かつて通り庭があった場所に埋められていた下水管がまだ土管であり、排水面を整備すること、そして東石の基礎の耐震性を高めること、昔の借家建てであることから隣戸と壁と柱を共有しており、これまではなかなか確保できなかったプライバシーを確保すること、そして階段の傾斜を緩くして、明るいものにすることなどが課題として挙げられました。加えてFさんは、改修に天然素材を用いることにこだわられたそうです。

改修計画の方針として、隣家と壁と柱を共有していることから、ジャッキアップなどで家の構造躯体の歪みを直すことができないことから、建物基礎の耐震性を高めるために布基礎にされました。躯体をさわれないという点で、床面の水平をだすのに苦労をされたとのこと。また、大屋根の形式も入母屋の屋根を切妻に替えられました。また

工夫された点としては、表の出格子の下に更に格子窓を設けることで、風通しを良くした点が挙げられます。裏庭に部屋を増築したいというFさんのご希望がありましたが、建ぺい率の関係から庭として広々とした空間が確保されることになりました。その結果、家全体が明るく風通しの良いものになっています。そして、階段の2階部分の壁面はガラスブロックにされ、大変明るい階段になりました。

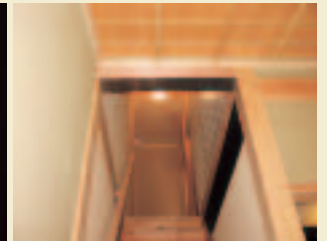
また、玄関のアクセントとして、床下を塞ぐ板に換気用の穴があげられていますが、これがライトアップもできる彫り込みで仕上げられており、細かいところまで丁寧に仕上げられていることが伺えました。

裏庭は、クリ材のデッキ、柿渋を塗った木の塀が設置された上背丈の低い植物が植えられるなど、広々として明るく気持ちの良い空間になりました。Fさんは、「ここが部屋にできなかったことだけがちょっと残念」とおっしゃっておられますが、広々とした裏庭は、出格子の下の格子窓や明るい階段などとあわせて風通しの良い明るい室内空間の構成に大きな役割を果たしています。

新しく明るくなった階段



表の出格子の下の格子窓



裏庭の風景

改修は、約9ヶ月間かかりましたが、Fさんは「明るく、風通し良くできて満足。土壁も息をしているというのが感じられて、とても気持ちが良い」、「狭い家でもこんなにきれいになるんだとびっくりしている」とのことで、改修して良かったとおっしゃってられました。そして、改修の際に、設計士さんに入ってもらって非常に良かったとおっしゃってられました。大工さんに直接言いにくいところ、ご近所の方々との調整など、「古材バンクの会」の設計担当の力石さんがこまめに対応されたとのこと。お話を伺った時に感じましたが、Fさんはとても元気で明るいおあさんで、古材バンクの会の力石さんもとても気さくで頼もしい方で、施主と設計士が非常に良い関係で改修が進められたことが分かりました。敷地面積約30坪のごく平均的な大きさの町家ですが、とても明るく、のんびりとしたあたたかい時間の流れる空間に生まれ変わりました。

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

木輪舎 (きりんや)

人が集って交流を深める場を目指し、西陣の家具店「ライフ吉川」内に「木輪舎 (きりんや)」ができました。店内には、訪れた人がゆったりできる大きな木製のテーブルとイスが置かれ、西陣の作家による陶器や小物といった工芸品、北山杉などでできた家具などが並んでいます。

今回は、西陣学区まちづくり委員会会長としてもお馴染みの、木輪舎の吉川哲雄さんにお話を伺いました。



木輪舎とはどのようなお店ですか？

永年既製家具の販売やリフォームを行ってききましたが、量販商品ではなく息の長い良質な商品を扱いたいとの思いを持ち続けていました。また、土地のものをその土地で消費する「地産地消」の実践も考えていました。このため昨年から京都市などに働きかけたところ、花背の材木屋さんや北山の木材を使って家具などを作っている方を紹介して頂きました。

リフォームについても、今までの材料に加え北山の檜や杉を使ったフローリングなどを手がけるようになりました。合板や輸入材に比べると割高で、工賃も若干高くなりますが、その分長持ちしますし、再利用なども可能です。合板では廃材を再利用することはほとんどありませんから、ゴミ問題を考えると北山の木を使うことは環境に良いのです。また、部屋の有害物質を吸収するので、シックハウス問題の対応としても良いと思います。環境問題を考えると、北山の木をもっと使うべきなのです。今の北山は必ずしもいい状態ではありません。北山の木を守るためにも今やらなければならないと思っています。

また、店のスペースを色々な人が交流できる場にしたいと思っていたので、学生ボランティアなどに入って頂



きました。ただし、誰でも良いというわけではなく、なるべく西陣に関係ある作家の陶器や工芸品を置きたいと思いい現在のスタイルにしています。

現在までの状況は？

今年の4月11日にオープンして以来、入りやすい雰囲気のためか、お客さんが増えました。北山の木を使ったベンチなどが良く売れています。また、今まで扱っていた高価なイスも以前より売れるようになりました。



そうは言っても、ベンチなどは北山の木を勧めているのでほとんど利益が出ていません。実は特筆できるのは、今までの主力ビジネスだったリフォームが伸びてきたことです。木輪舎としてリニューアルした際、案内のダイレクトメールなどを送ったのですが、今までのお客さんからのリフォームの発注も増えています。新しい試みに興味を持ち評価して頂いているのかもしれませんが、北山の木を使っていることが宣伝効果になっているのは間違いなく、質の高いものを扱っているということが、広まっている理由のひとつだと思います。

地域との関係は？

リニューアル以前は人の交流もあまりありませんでしたが、リニューアル

以降、ふらっと立ち寄ってくれる若いお客さんなどが増えました。また、月に1回ボランティアによる工作教室などの企画を開催しています。まだまだ始めたばかりですので、企画がある方は提案して頂きたいと思います。

リフォームの仕事をするのは、口コミ経由の親しい方ばかりですが、家の奥まで見てする仕事ですので、どうぞご近所過ぎると頼みづらいようです。できれば、上京区だけで仕事をしたいと思っていますが、現在は京都市内のあちらこちらに伺っています。

今後の展開について教えてください

最初に考えたのはインターネットの活用です。これからは情報をどんどん発信し、多くの人とコミュニケーションを図る必要があると考えたからです。しかし、実際にはインターネットを活用したコミュニケーションは負担も大きく、その上顔が見えないなどの弱点があります。今では、店舗にもっと人が来て交流できる企画の充実を考えています。

リフォーム事業については、北山の木を使ったフローリングなどを広めていきたいと思っています。具体的には、マンションなどで、一部屋からのリフォームを提案していきたいと思っています。一室であればリフォーム費用は低く抑えられますし、これだけでシックハウスなどもだいぶん和らぎます。高齢者などが、お孫さんの育児環境などのために求められる需要を見込んでいます。

お問い合わせ先
京都市上京区堀川通上立売上ル竹屋町584番地
木輪舎 (きりんや)
TEL 075-414-2914

『まちづくり交流』

パートナーシップによるひろばづくり

～「(社)京都府建設業協会京都支部青年部会と 草田町住民の交流」～

地域コミュニティ広場整備事業

山科区音羽学区「草田ちびっこひろば」は、平成15年9月、地域住民の主体的活動と京都市、建設業、大学研究室の方々のサポートによって、新たなコミュニティ活動の場「音羽夢ひろば」に生まれ変わりました。

今回ご紹介するこの「音羽夢ひろば」は、計画段階から(社)京都府建設業協会京都支部青年部会(以下「建設業協会青年部会」)が関わって整備が進められた点に特徴があります。

きっかけ

「草田ちびっこひろば」は、近年、利用者も少なく雑草等荒れ放題の状態でした。そんな広場を見て、地域住民の皆さんは「何とか甦らせたい」という思いを持ち、広場の整備について何度も山科区役所に相談しておられました。ちょうど同じ頃、建設業協会青年部会は発足20周年の記念事業として、何か有効なまちづくりまたは住民参加の取組に参画したいと京都市へ相談を持ち掛けておられました。こうした両者の思いが、原動力となり、パートナーシップによるまちづくりを推進している山科区役所の、「個性あふれる区づくり推進事業」として「草田ちびっこひろば」の再生が実現することとなりました。

住民との共同作業

「草田ちびっこひろば」の再生は、参加者が共通の体験をしながら提案や計画を作っていくワークショップ(以下



東側入口のレンガの敷き詰め

「WS」)方式で進められました。地元の草田町では、町内会が東と西に分かれており、広場の運営はこれまで草田東町の

みが担ってきましたが、この取組では、草田町全体のコミュニティ広場として再生を行うことが目標に掲げられ、両町内の誰もが参加できる「みんなの広場づくり」が進められました。

こうした地域の主体的取組に対し、市は資金や運営面で



WSで設計模型案づくり

サポートし、京都大学農学部は、広場づくりについての専門的知識とWSを進める上でのノウハウを提供しました。そして今回、計画の構想段階から参加した建設業協会青年部会は、工事面での知恵や資材提供の役割を担うだけでなく、「こどもWS」で焼き芋を焼いたり、住民のできない地ならしやフェンスの組み立て、更には、各社の社長自らがスコップやつるはしを持ち、住民と一緒に汗を流すなどの活動をしました。立場や役割の異なる四者が一堂に会し、共通の目的に向かって知恵と体力を総動員したことで、お互いに何でも言える関係ができ上がりました。

広がる交流

また工事をプロの手に任せきりにせず、関わった人たちみんなが、できる範囲で参加するという方法を取ったことで、建設業者の方々と住民との交流が生まれたことはもちろん、地域の中でも親の頑張る姿を見て子どもも頑張るというそんな親子の交流、教育の場にもなりました。「広場での子ども同士の交流をきっかけにして、親御さんとも知り合いになった」という声も聞かれ、広場づくりで始まった交流は住民間にも着実に広がっていきつつあります。

これから

建設業協会青年部会のまちづくり特別委員長の絹川雅則さんは、「私達の仕事は、今までモノを造りそれできよならをする仕事だった。これからは、今回の取組のようにモノ造りを通じて地元の人々が元気になる種まきをしていきたい」と話しておられます。

「音羽夢ひろば」の完成後、地域住民の皆さんが中心と

なって維持管理や運営について考え、行動する「夢ひろばの会」が結成されました。毎月1度誰もが広場の草刈りや遊具点検などに参加できる「夢ひろばの日」の設定など、誰にも居心地の良い、楽しい雰囲気にあふれた場所とするための活動を進めておられます。取組のコーディネーターとして参加された京都大学農学部の吉田鐵也先生は、「住民一人ひとりの中には、秘めたるパワーがある。建設業協会青年部会に参加してもらった今回の取組は、それらを引き出し、つなぐいい機会になった」と話しておられます。

今後は、地域住民の秘めたるパワーをまちづくりに引き出すことはもちろん、企業との連携交流による更なるパワーアップの可能性を追求することも非常に重要な視点と考えられます。多様な主体の交流によるコミュニティの活性化とともにまちづくりが他の地域にも広がっていくように、このようなきっかけづくりが今後ますます必要になってくるのではないかと感じました。



お披露目式

(注) ワークショップ

参加した全員がきちんと意見が言えるように、小グループに分かれて意見を出し合い、そしてみんなで意見をまとめ、その成果を共有していく会議の方式です

私と京都



京都市都市計画局長
大島 仁

—1冊の本との出会い—

私の手元に1冊の岩波新書がある。林屋辰三郎著「京都」(1965年(昭和40年)2月15日第6刷発行)がそれだ。かなり手垢にまみれている。私は昭和40年の春、田舎から当時は都会だと思っていた伏見区にある中学校に進んだ。「京都」のことはほとんど何も知らなかったと言ってよい。伏見の大手筋商店街に行ったとか、いい服を着て大丸・高島屋へ何回か買い物に行ったというのがそれまでの私と「京都」の関係だった。そんな私が学校で友人の話す京都のことが理解できず困っていたときに出会ったのがこの本だ。当時の社会科の先生の薦めがあったように記憶

している。何度も何度も読んだ。裏表紙には、入学祝に買ってもらった万年筆で名前が書いてある。初版(1962年)から40年余を経た今読み返しても新鮮さを失わない、いつも何か新しい発見のある名著である。この本が私の京都入門書ということになる。その後、学生時代を京都で過ごし、終には京都市に奉職することになるわけで「京都」とはやはり縁があったということになる。

さて、役所には人事異動はつきものである。私も昭和52年に採用されて以来様々な局・課で仕事をしてきた。民生局(現在の保健福祉局)で障害福祉行政や同和行政に携わったり、清掃局(現在の環境局)でゴミ処理行政に携わったりした。特に障害福祉課のときは、京都だからこそできること、京都だけにしかできないことがあるはず、だからそれをやるんだと意気込んでいた気がする。福祉のまちづくりという表現は、当時よく使われていたが、それは「京都らしい」福祉のまちづくりと同義であったし、自分のやるのが「京都らしい」福祉そのものだという強い自負もあった。思えば若気の至りである。

ところで、今回、都市計画局で「京都らしい」まちづくりを目指すことになった。この京都らしいとい

う表現はついつい使ってしまうが実は中身は不透明である。気をつけないと障害福祉課時代の私のように独善に陥ってしまう。そもそも「京都」はいつも「京都」だったのであり「京都」でなかった時期があったわけではない。京都らしさが守られているとか守られていないとかいうのは、何か客観的な「京都」の基準なるものがあることを前提としているが、実際はそんなものはなく、あるとすれば発言者の頭の中にだけ、つまり発言者の数だけ無限にあるということになる。百歩譲って何かあるとしても、それは最大公約数としての京都らしさということだろう。そうした意味でいうなら、今問われているのは、その最大公約数すら守っていないのではないかということである。これは難問である。

この4月に都市計画局長を拝命したばかりの私だが、やらねばならないことは分かっているつもりである。広く意見を聞くこと、そしてスピード感のある行政執行を心がけること、この2点だと肝に銘じている。もちろん簡単なことではない。悩むに決まっている。だから、このポストに就いている間、私の机の上にはいつも例の新書が置かれていることになるだろう。あの青春の1冊が。

センター語録

高瀬川に浮かぶ花筏にはじまって、今は目に映りこむようなまばゆい新緑の季節、センター近くの鴨川から望む東山三十六峰は、「山笑う」の形容がぴったりの美しさです。牛若丸と弁慶が対決した五条大橋のもとでは、悠然とアオサギが二羽、きらきら光る川面に佇んで、水中の小魚をねらっています。都市の真ん中を流れる川にも、こんな豊かな自然の美しさを、歴史とともに残しているのが、京都のまちです。折りにふれ、センターのある菊浜学区の周りを歩くようにしています。はるか平安の昔、光源氏のモデルとも言われる源融が住んでいたという六条河原院の跡であることを記した石碑が、高瀬川沿いの大きな榎木の下にひっそりと建っています。鴨川の流れ、東山の木々の緑、そこに浮かぶ月の風情を愛でて、融も邸を営んだのでしょうか。千二百年の歴史を刻んだまちに、古人が

見ていた景色を想い、「景観」という言葉を考えていました。「景観」の「景」という字は、日の光に照らされた様子をあらわします。四季折々の天候の変化に応じて刻々と移り変わる光に照らされた「たたずまい」というのが「景観」のもともとの意味なのです。ここ京都を、刻々に彩ってきた光に照らされた「たたずまい」の中から、長い時間をかけて「まち」が「人々の暮らし」が生まれてきたのでしょうか。京都のまちを歩くのは、その光のもと形成されてきた「たたずまい」の歴史を、今、この光のもと、身体全体でもう一度感じ直すことだと思います。しかし、その光を感じる機会がどうも少なくなっているような気がします。私の感性が鈍くなったのか、光を照らし返す「たたずまい」が消えていっているのか、歩きながら考えてしまうこのごろです。

(景観・まちづくりセンター事務局 O・M)



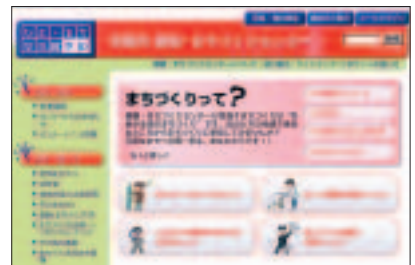
センターからのお知らせ

京都市景観・まちづくりセンターホームページ

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp>

センターの取組内容を初め、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。

皆さんの地域のイベント情報、まちづくり情報も掲載します。メールマガジンの登録も受付中です。



センター活動の新拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1 (河原町五条下る東側)

「ひと・まち交流館 京都」地下1階

TEL 075-354-8701

FAX 075-354-8704

e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp

●開館日 (相談の受付等)

9:00 ~ 21:30 (月曜日~土曜日)

9:00 ~ 17:00 (日曜日・祝日)

●休館日

毎月第3火曜日 (国民の祝日に当たるときは翌日)

年末年始 (12月29日~1月4日)

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



賛助会員の募集 (平成16年度分)

平成16年度の賛助会員を募集しています。京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

【特典】

- ・ニュースレター (年4回・季刊) の送付
 - ・冊子等センター発行物の割引
 - ・ニュースレターでの活動紹介
 - ・シンポジウム、セミナー等への優待
- 平成16年度より、賛助会員の方は、景観・まちづくり大学のすべてのセミナーを無料で受講できます。(賛助団体の方はひとつのセミナーで3人まで受講可)

【年会費】

個人1口：5千円 団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加して頂ける方を募集・登録しています。